
狂人の嘘言記 ～レーボン賞～

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂人の嘘言記 ㄱレーボン賞ㄱ

【Nコード】

N2055Y

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

列車を待っている間、ベンチに打ち捨てられていた新聞を私は読んでいた。

(前書き)

勿論、此れは要らぬ忠告であろうが、以下に示す文は全くの虚構であつて實在のあれやこれとは全くもつて因果關係を持たない。

此れは全て或る一人の狂人の戯言であり、私は彼の語る其れを紙の上に書き写したに過ぎない。

故に今より紡がれる文字の列は現実世界とは明確な一線を画すのである。

「お父さん、僕大きくなったらLEBON賞を取るんだ」

「おお、坊やそれは凄い夢だね」

「だから僕、LEBON賞を取るために頑張ってお金持ちになるよ」

「ははは良い心掛けだ、坊や。だけどねLEBON賞を取るために必要なのはお金だけじゃ無いんだよ」

「お金だけじゃないの？」

「ああそうさ。LEBON賞を取るにはお金以外にも権力がいるんだよ」

「権力が無いとダメなの？」

「ああもちろん。だから坊やはお金持ちじゃなくて政治家におなりなさい。そうしたら勝手にお金も転がり込んで来るからね」

これは我が国の一家庭で見られた一つの滑稽な会話である。

この話が滑稽である点は世界的に権威のあるLEBON賞に関して生じた父親と息子の勘違いに他ならない。

「LEBON賞を取るためにお金持ちになる」という息子の発言を聞いて、父親は「息子はLEBON平和賞を取りたいのだ」と勘違いしたのである。

確かにLEBON平和賞はLEBON財団から申し込み用紙を買い取り（我が国の貨幣に換算しておよそ10億ネーカーである）申請書が受理されれば受賞出来ると言われているが、その申し込み用紙の購入資格には政府高官である必要がある。

故に父親は息子に「金と権力が必要である」と言ったわけだが、実のところ息子はLEBON平和賞など取ろうとはしていなかった。

息子が目指しているのはLEBON科学賞の方であり、その科学

的研究に必要な研究費用を捻出するために息子は「お金持ちになる」といったのである。

世界的な大発見をする研究機関は世界で一番多くの研究費を持っている所だというのは我々大人にとっては常識である。

しかし多くのコードモらしい子供は情熱や努力といった夢物語を信じており、その点から言ってもこの滑稽譚に登場する息子は非常に現実的な視点を持っているのである。

そんな息子に向かって物識り顔でモノを教える父親と息子の現実的な考えとのギャップがこの話が滑稽である主要要素なのである。

一家庭の微笑ましい会話の中でこのようなLEBON賞の本質を見ることになるのは正直に言って驚きである。

しかし人は皆、LEBON賞を取る可能性を秘めているのである。もちろん十分な金を持っていればの話であるが。

◆参考…LEBON賞（レーボン賞）とは

今でこそ知らぬ人の居ないレーボン賞は、今から百年以上前に実業家デルフラ・レーボン氏の遺言に従って創設された世界的に権威のある賞である。

『人類の進歩に大きく貢献した人物』に贈られるこの賞は科学賞、文化賞、平和賞の三部門に分かれており、受賞者には『人類の進歩の更なる発展』を祈願して1億ネイカーもの賞金が与えられるのである。

この世界的な権威と力を持ったレーボン賞を受賞するため、多くの科学者が論文を盗み合い、多くの文化人は世間の批評に怯えて暮らしている。

政治家たちはレーボン平和賞受賞に備えてスマイルの練習をしていると云う。

原則として死後の受賞は出来ないが、昨年の春に亡くなったドラブラフ大学のナムニートス氏は特例としてレーボン科学賞が授与された。

氏の眠るオイラトノ州には賞金1億ネイカーを賭した巨大で豪華な墓石が見られるという。つまりその墓石こそが『人類の進歩の更なる発展』なのである。

ライアー通信(3131年13月号)

記者 アドルフ・アルブレヒト

○

朝の電車を待つまでの間ベンチに打ち捨てられていた新聞を読んでいたのだけれどこれは酷いね。いくら三流ゴシップ誌とは言えLEBON賞をここまで扱き降ろすとは。

これではLEBON財団も黙ってはいないだろう。いや、こんな下らない記事に一々腹を立てる程彼らも暇では無いかもしれないね。それにしても電車はまだだろうか。ターミナルの時刻表を見ようと席を立った時、向こうの方から一人の老婦人が近づいて来た。

「ねえ、そこのお若い人。クロイ・ウェン行きの列車はこのホームで良かったのかしらねえ」

「ええ、クロイ・ウェン行きはあと30分程でこっちのホームにやってくるよ」

そう言うとき上品そうな老婦人はホッと胸を撫で降ろした。おそらく列車に乗り過ぎすまいと急いでいたのだろう。

「あら貴方、それはもしかしたら……」

「え、ああこれですか？　いいいえそこらに捨てられていた三日前の新聞ですよ」

ふと老婦人は私の手元に握られていたクシャクシャのライター通信を見るなり、顔を真っ赤に燃え上がらせ興奮した様子で唇をわなわなと震わせた。

「ど、どうしたんですか、急に。もしやお身体の具合でも」

「い、いえ身体の方は何ともありませんのよ。ただその新聞……嘘だらけで恥知らずなそのライター通信を見ていたら沸々と怒りが湧き上がって来るのですわ。ええい忌々しい、そんな新聞は今すぐ燃やしてやりたいところです」

先程までの上品さからは信じられないほど老婦人はカッカと怒りに身を震わせていた。

「ちょっと落ち着いて下さい。差支えなければ私がお話を聞きますよ」

「ええ、どうか聞いて下さいまし。その新聞は私の夫を侮辱したのです。亡き夫フラー・ナムニートスはライター通信誌上で耐え難い侮辱を受けたのです」

「フラー・ナムニートス……もしかしてLEBON科学賞の……」

「そうです、その通りです。私の夫は研究にその一生を捧げ昨年哀しい死を迎えましたが、その成果を認められてLEBON科学賞の授与を許されたのです。ですがその忌々しいライター紙はあろうことかLEBON賞を侮辱するような記事を書いたのです。LEBON賞を侮辱することは私の夫を侮辱することと同じですから、私は居ても立っても居られなくなって今からライター本社のあるクロイ・ウェンに向かうところなのでございます」

ナムニートス婦人は手に握ったハンケチを今にも破らんばかりの勢いで、これでもかというほどの憤慨に満ちた訴えを語り尽くした。時間を忘れるほどに熱い語りだったため、気が付けばクロイ・ウェン行きの列車がホームに到着していた。

「なるほど。やはりこんなゴシップ誌に書いてあることはほとんど嘘ばかりなのですね」

「ええ、ほとんどどころか全部嘘です。マスコミの言うことなんて決して信じてはいけませんよ」

私が頷きながら新聞をゴミ箱に投げ込むと、列車に乗り込もうとしていたナムニートス婦人は最後にこう語ってくれた。

「だって夫の墓があるのはオイラノト州じゃなくセボイク州なんですもの」

発車のベルが鳴り響き、列車はクロイ・ウエンに向かって走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2055y/>

狂人の嘘言記 ～レーボン賞～

2011年11月4日04時21分発行